

令和3年度市民提案型市民協働事業 第1回現場見学会報告書

—岡さんのいえ TOMO—

- 1 日時 : 令和3年6月2日(水) 14時00分から15時00分まで
- 2 場所 : 岡さんのいえ TOMO (世田谷区上北沢 3-5-7)
- 3 出席者 : 繁平 光伯、野村 淳一郎、高橋 ひかり、佐藤 阿覧、菅原 理奈、梶川 朋
- 4 見学会内容

(1) 岡さんのいえ TOMO について代表の小池良実さんより紹介

※詳細については添付資料を参照

⇒ (小池さん) 築約80年のこの家にはもともと女性2人が住んでいて、その1人が私の大叔母・岡ちとせさんだった。その方の介護の窓口に最後の6年ほどなった。2006年に99歳で他界した岡さんより、この物件を地域の方に使っていただければとの遺言があり、2007年から手探りで地域に開放してきた。

ちょうど世田谷トラストまちづくりの「地域共生のいえ」の構想期で後押ししてもらったが、固定資産税や水光熱費がかかる中で金銭的な補助はなく、民間の助成金を取るなど手探りで活動してきた。

今も運営を共にしている仲間は、世田谷トラストまちづくりが当時開催していた市民大学のフィールドワークで来てくれた生徒さん(当時主に仕事を定年退職して地域での活動を始めようとしていた方々)だった。

2011年の東日本大震災をきっかけに、幸か不幸か地域の絆がクローズアップされ、一気に取材が増えるなど知名度が上がった。

(2) 小池さんと参加者との意見交換

⇒ (小池さん) 岡さんのいえが多世代の集いの場になったのはたまたま。市民大学を経由して関わり始めてくれたシニア世代がいて、そこにあかちゃんを連れてお母さんたちがやってきた。すると「ニセじいじ」が「ニセ孫」を抱っこして、すごく良い感じになった。私が羽根木のプレーパークの世話人をしていた関係で、そこで出会ったお母さんたちがあそびに来てくれた。その時のこどもたちは大きくなって誰も来なくなったが、今は近所の高齢の方が介護予防体操に使ってくれたりしている。

私のように、この人を看取ったらこの家が空くかもしれない、そうなったらどうしようとか、空き家になったこの家をどうしようというオーナーはいるはず。そうしたオーナーさんの揺れる思いに寄り添ってほしい。私は岡ちとせさんが生きていた頃に世田谷トラストまちづくりに巡り合い、中間支援組織として、福祉や医療の専門家はいなかったが、岡さんの終末期の過ごし方を含め傾聴して丁寧に寄り添ってくれた。大叔母の家だし、私の気持ちとしてもすぐに皆さんの場にできたわけではない。いろいろな思いを整理しながらだんだんという感じだったので、そこに寄り添ってくれたのがとても嬉しかった。

地域に開くにあたって、当初は誰かに貸して私は何もしないだろうと思っていた。世田谷トラストまちづくりの人もそういう方向でいろいろ探してくださったが、少し

時期が早すぎたのか見つからなかった。それで、仕方がないから私がやるか、という出発だった。まちづくりって何かも知らない中でのスタートだった。

⇒ (中島さん：活動当初より小池さんと運営を共にしている市民大学の元受講生) 空き家などを開放した場には「家」と「人」の両方が必要になるが、どちらが大事かという「人」(オーナーとスタッフ)。世田谷にも20か所以上「地域共生のいえ」があるが、スタッフが集まらなかったり年を取ってリタイアして困っているケースが多い。

⇒ (小池さん) 「地域共生のいえ」にはオーナーの自宅を開いているところも多いが、コロナ禍で自宅に不特定多数の人が出入りするリスクを考えて、いま「地域共生のいえ」の7割が活動を休止している。岡さんのいえもこれまでは週1回13-17時で開いてきたが、コロナ禍ではリスク軽減のため月2回15-17時で開いている。

週1回の開放に落ち着いた経緯としては、まずは定期的に開けないと認知されないということ。そのうえで、空き家だったので毎日開けても良かったが、スタッフがシルバー世代なのでちょうど良いペースとして週1回になった。耐震改修をしてからは、もう少し人を入れても大丈夫ということで、区から受託した中高生の居場所づくりや児童養護施設を退所した若者の食事会(委託事業として1回3万円の補助金が出ている)など活動の幅を広げてきた。場所貸しも少しずつ広がってきて、いまは近所の方がそろばん塾、ECC、総菜販売などで使ってくれている。そうやって少しずつ地域に認知されてきたが、最初は警戒する人もいたし、時間はかかる。オープンした当初は「何やってるんだか全然わからない」とも言われた。

⇒ (野村さん) 区からの受託事業以外に、開いていることへの行政からの補助はあるか。

⇒ (小池さん) いまのところない。固定資産税や水光熱費はどんなところでもかかるので、今後こうした場を増やしていくにあたって大きな課題だと思う。岡さんのいえとしては、場所貸し(1時間1,000円)と2階に「下宿」している学生さんがいて、その僅かな家賃でランニングコストを賄っている。他の自治体では、武蔵野市の「テンミリオンハウス」のように自治体が大きな補助金を出して運営している現場もある。

狛江市は財政的な規模が小さいなら、小回りを利かせるのが良いと思う。お金があればそれでうまく回るのかということもそうでもない。お金がつくことでやらないといけないことができて、無理をして空中分解するというケースもある。

⇒ (繁平さん) 狛江は新しい人もたくさん移転してきているので、どういった街の暮らしが良いのかということもまだバラつきがあるように思う。その街と人にとってどんなかたちが良いのかということがこれから考えていくにはちょうど良いのかもしれない。

⇒ (小池さん) そのバラつきをまとめようとしなくていい。「バラつき」は「幅」なので。「私についてきなさい」という感じの人もあるが、いろんな人がいるし、得意分野もそれぞれ違うので、変にまとめようせずそれぞれの良さをうまく料理してほしい。

⇒ (繁平さん) 狛江ではコロナ禍でも新しい小さなお店が増えたりもしているが、そうした方がどれだけ地域に対してポジティブなアクションを起こすかということがまだまだ見えていないところがある。

⇒ (小池さん) 地域の問題解決ってそんなに簡単なことではない。「地域」にあまりこだ

わらなくても良いのかもしれない。地域を超えて、誰が来ても良くて、誰でも手伝えるというほうが良い。逆に地元ではないから来やすいという人もいるかもしれない。地域に居場所がたくさんあり、「選べる」ということのほうが大切。

あとは、居場所を開いたら続けてほしいというのは言われた。居場所に来られなくても、そこがあると思うだけで、何かあればそこを頼れば良いと思えるだけで心の支えになる人もいる。続けることは力があるが、続けられるような「ゆるい仕組み」がだいじ。

- ⇒ (繁平さん) 世田谷トラストまちづくり経由以外の人で運営の方はどうやって出会ったのか。
- ⇒ (小池さん) 学生が多くかかわってくれている。初めの頃はまだこうしたところが珍しかったので、卒論や修論の対象になることが多かった。そこから大学の研究室につながったりして、広がってきた。
- ⇒ (高橋さん) 人と密接にかかわっていかないと実現が難しいのだなということを感じた。人間関係、信頼関係がうまく構築できることが大事なのだなと。
- ⇒ (小池さん) ゆるくて良いから、細く長くいろいろな人とつながることが大切。無理に理解してもらおうとせず、コソコソと活動することも必要。「良いことをやってる」とか「理解してもらわなきゃ」ということを背負うとキツくなってしまう。
- ⇒ (中島さん) オーナーさんが隣近所の付き合いがしやすいように手助けすることも行政の役割かもしれない。
- ⇒ (小池さん) コロナ禍では人と人がつながりにくくなった反面、オンラインでつながりやすくなっているところもある。こういう時期だから、普段はつながれない人とつながろうとしてみることも良いかもしれない。

以上

令和3年度市民提案型市民協働事業 第2回現場見学会報告書

—しばさき彩ステーション—

- 1 日時 : 令和3年6月25日(金) 14時00分から15時00分まで
- 2 場所 : しばさき彩ステーション(調布市柴崎1-64-9)
- 3 出席者: 太田 美由紀、野村 淳一郎、菅 亮太、佐藤 阿覧、菅原 理奈、梶川 朋
- 4 見学会内容

(1) しばさき彩ステーションについて副代表の大木智恵子さんより紹介

⇒(大木さん) しばさき彩ステーションは2019年の7月にオープンしたので今度の7月で丸2年になる。地域のボランティアに支えられながら毎月様々な企画をおこなってきた。最近は乳幼児を連れたお母さんを対象に、近所の元気高齢者が料理を教える企画も立ち上がるなど、次々にアイデアが持ち込まれている。

2019年の立ち上げから関わってくれているボランティアもおり、口コミでボランティアの輪が広がってきた。現在は地域の「サポーター」が40人ほど、利用者として登録されている方は250人ぐらいいる。年間で延べ3,000人以上が利用している。規模は小さい場だが、常に誰かしらはいるという状況になっている。施設ではなく、家と似た小さな場だからこそ来やすい面もあるようだ。

1か月のイベントのメニューとしては、「地域づくりセミナー」という専門職が来て話をする講習会を月に1回必ずおこなっているのと、「オレンジカフェ」を市と連携してやることは決まっているが、それ以外のイベントはサポーターのみなさんと相談したり持ち込まれたアイデアを受けてその月ごとに組んでいる。こちらが提案するものよりも、地域の方々が自主的に持ち寄った企画のほうが多い。

私は「管理人」という立ち位置で、地域の方が持ち寄る企画を調整したり誰かと誰かをつなぐコーディネーターという役割。サポーターも役割分担はあまり決めていない。ここは「おうち」なので、何曜日に誰がどこを掃除するとかは一切決めていなくて、みなさん経験豊富な地域の方なので、自分たちで考えて行動してくれる。

⇒(鈴木さん: 立ち上げからサポーターとして関わっている地域の元気高齢者) 彩ステーションは毎日様々な方が出入りしているので飽きることがない。自分ができることを考えながら関わっているとボヤボヤしてられない。

(2) 大木さんと参加者との意見交換

⇒(梶川) コロナ禍になってから食を囲むことを多くの居場所が断念しているなか、彩ステーションはそこに積極的に取り組み続けていることが印象的。

⇒(大木さん) 2020年の3-5月は3か月だけ高齢者の利用を遠慮していただき、食事の提供も休止した。そのときにたまたま外を掃除していたら、近所のお母さんが、学校が一斉休校で家にいるこどもが昼夜逆転したりゲームばかりやっていて、親は働いているので昼はカップラーメンを食べたりしているという話から、彩ステーションの場でこどもたちを預かる活動を始めた。

休校期間、毎日7-8人のこどもが利用して、近所に住んでいる塾を運営していた方

や英語を教えられる方、ジムのインストラクターをしている若者などが手伝ってくれた。2019年の立ち上げから半年ほどは高齢者の集いの場が主な機能だったが、コロナ禍でこどもやその保護者、そしてボランティアの若者などにつながる事ができた。

2020年の6月に最初の緊急事態宣言が解除された後も、夏祭りがすべて中止されるなどしたため、休校期間に仲良くなったこどもたちが彩ステーションで夏祭りをしたということで、こどもたちが主催する夏祭りをおこなった。9月の敬老会でもこどもたちが手伝ってくれるなどした。こどもたちもこのように巻き込めば彩ステーションで多世代交流ができるということが感覚的に得られた時期だった。

⇒ (梶川) 2019年7月の立ち上げ当初から高齢者の憩いの場を目指していたのか。

⇒ (大木さん) 彩ステーションのオーナーは隣接する西田医院の西田院長で、私は元々グループホームとか地域包括支援センターで働いていた。その頃の出会いで、地域に高齢者の集いの場をつくりたいと思っていた西田院長を手伝うことになった。

まずは場所さがしからおこなったがなかなか良い場所がなく、たまたま西田医院の隣の店舗兼住宅が、元々建具屋をされていたが高齢のため10年前に店は閉めて住居としてのみ利用していた物件で、そこを貸してほしいと相談したところ、高齢で貸すことは難しいので買ってほしいという話になった。

元々は賃貸で場を借り上げ、助成金で賃借料を賄うことを考えていたが、このような経緯で西田院長が現在の物件を購入して活動を始めることとなった。私も西田医院の職員として、給与をもらいながら活動している。ゆくゆくは彩ステーションが経営的にも自立できることを目指している。

物件を購入したときは、10年ほど使われていない状況だったので、メンテナンスが必要だった。修繕費は西田医院が負担した。地域のサポーターと一緒に掃除をしたり壁紙を交換したりしながら最低限のリフォームをおこなった。

行政はあてにならないので、民間に目を向けながら、地域にある企業などを巻き込んだ地域づくりにも取り組んでいる。自分自身も、今の活動を仕事だからとやっているわけではなく、地域のひとりとしてこの街を良くしていこう、自分自身がこういう街に住みたいなという思いで取り組んでいる。いつか自分がここを利用する側に回るかもしれない。そのときにこういうふうだとおもしろいだろうなという思いで関わっている。

⇒ (梶川) 彩ステーションは多くのサポーターに支えられているが、オープンする前から協力者を募集していたのか。

⇒ (大木さん) 事前にサポーターの募集はしていなかった。西田院長が関わっている認知症サポーターのグループなどから最初は手伝いに来てくれた。そこから口コミで多くの人に関わってくれるようになってきた。

⇒ (梶川) 調布市との連携はオープン当初からあったのか。

⇒ (大木さん) 初めの頃はなかった。たぶん市役所は1年ぐらい彩ステーションがやっていることを冷ややかに見ていて、少しずつ地域の居場所とか認知症高齢者を地域で支えるということの具体的な実践として理解してくれてきた。西田院長が市の医師会の理事をしているなど、活動母体が信頼してもらいやすかったことも大きい。

今年の4月から居場所のスタートアップの助成金として年間120万円を調布市から受けられることになった。1か月10万円というかたちで何に使っても良く、彩ステーションの他もう1か所、仙川のpostoという事業所が受けている。

⇒（太田さん）このあたりは人通りはどうなのか。シャッターが下りている商店が多いようにも見受けられた。

⇒（大木さん）柴崎駅に向かって通過する人がすごく多い。人がゆっくり歩くという雰囲気ではない。昼間シャッターが下りている店舗もバーや居酒屋として夜だけ営業している。

⇒（太田さん）彩ステーションが開いているときは常に大木さんがいるかたちなのか。

⇒（大木さん）開所している10時から16時まで基本的にはいる。ただ、不在のときもあり、そういうときはサポーターの方やそのときイベントで使用している方に留守番を任せている。

⇒（菅さん）大木さんはここを専属でされているのか。

⇒（大木さん）西田医院の職員として、彩ステーションの管理者をしている。彩ステーションを立ち上げるために呼ばれたかたちで、以前は調布で勤めた後10年ほど西東京市の地域包括支援センターに勤務していたが、そろそろ地元の調布に戻ろうかというタイミングで西田院長から声がかかった。

今は西田医院の持ち出しで運営費を賄っているが、ゆくゆくはここで居宅介護支援事業所を兼ねるなど収入源を得て自立することを目指している。総合事業の通所型サービスBは調布市ではやっているところがないと聞き、これまでは考えてこなかった。

⇒（野村さん）もともと彩ステーションの物件に住んでいた方は、購入したタイミングで退去されたのか。

⇒（大木さん）もともとのオーナー夫婦は、10年前までここで建具屋を営んでいて、6年前まではこの住居部分に住んでいた。しかし、物件が老朽化してきたことと住居としてのみ住むには広すぎて、マンションを購入し転居されていた。その後は空き家になっていた物件だった。空き家ということで活用可能性を考え、オーナーを特定し連絡を取った。空き家になっていたため中にびっしりとオーナーの荷物が詰まっていたが、その荷物の処分は購入した西田医院に任されたため、その整理と処分から活動が始まった。

⇒（野村さん）イベントのメニューがない日はカフェとして誰でもウェルカムなかたちで開けているのか。

⇒（大木さん）そうだ。ただ開けているだけでも家族介護をしているケアラーの方などいろいろな相談事が舞い込んでくる。それらを必要に応じて適切な相談先や支援につなげている。Facebookを見て来る人が多い気がする。

コロナ禍での活動に際しては、集いの場としての活動の是非に様々な考え方があることも意識している。現在会食の活動には独居の高齢者、認知症高齢者という孤立のリスクや食事の摂取に課題がある人を対象におこなっていて、食事を囲む場面での世代間交流は控えている。

⇒（野村さん）活動を始めた当初から利用者は多く来ていたのか。また、活動メニュー

も初めから豊富にあったのか。

- ⇒ (大木さん) 最初は今ほど活動メニューはなく、来てくれる人と一緒にアイデアを出し合いながら徐々に増えていった。普通の民家なので場所のキャパシティは決して広くないが、受け入れられる範囲で工夫しながら、利用者も口コミで少しずつ増えていった。
- ⇒ (菅さん) 市の子ども関係の部署や教育委員会、学校とは連携しているか。
- ⇒ (大木さん) まだ全然できておらず、来てくれているお母さんたちの口コミや、社会福祉協議会とのやりとりで子育て世帯とつながってきた。近隣で塾をしている人や子どもたちに昔あそびを教えたいという人がおり、こんなことを子どもたちにしてあげたいねという思いから始まった活動もある。
- ⇒ (野村さん) 活動を始めたとき近隣の住民の方の反応はどのようなだったか。
- ⇒ (大木さん) 地域に新しい居場所ができるということですのでごく楽しみにしてくれていた。最初のオープニングのときはここに 40 人ぐらいが集まった。マイナスな意見はこれまで特に聞いていない。それは、よそ者がいきなり始めた活動ではなく、これまで地域に根づいてきた西田院長が始めた活動だったということも大きいと思う。
- ⇒ (野村さん) サポーターや運営に関わっているボランティアで地域外から来ている人はいるか。
- ⇒ (大木さん) 何人かいるが、みんな調布市内で、自転車で来られる距離で関わってくれている。今までは月に 1 回サポーターズ会議をおこなっていたが、コロナ禍になってからは開催していない。サポーターズのグループ LINE をつくっていて、そこで情報共有をおこなっている。運営に関しては私が中心的に進めながら、お金のことに関しては西田医院と相談しつつ、会計については西田医院の会計士がやってくれている。

以上

